

第2回 首里城復興基本計画に関する有識者懇談会 議事要旨

日 時：令和2年11月27日（金） 9時～12時

場 所：ホテルサンパレス球陽館2階パレスコートA

出席者：下地芳郎委員（座長）、安里昌利委員（座長代理）、
波照間永吉委員（琉球文化継承・振興検討部会長）、
池田孝之委員（新・首里杜構想検討部会長）、
崎山律子委員（琉球文化継承・振興検討部会委員兼務）、
田名真之委員（新・首里杜構想検討部会委員兼務）、
佐久本武委員、玉那覇美佐子委員

第1章 はじめに

- ◆ 次期振興計画の最終年度を想定した令和13年を復興基本計画の最終年度としているが、さらに将来に向けて取り組む施策もあるため、超長期的な施策の取り扱いについて、計画への書きぶりを検討すべき。

基本施策1 正殿等の早期復元と復元過程の公開

- ◆ 復興過程において、北部から木材を運ぶ時には国頭サバクイを、また与那国から大龍柱の石材となるニービヌフニを運ぶ時には木遣り（きやり）、再建中には首里の大城（うぶぐしく）グェーナといった各地の芸能も一緒に行う事で、地域文化の伝承や、そこに住む人々への誇りにもつながる。
- ◆ 木挽き式などの行事は県民や観光客にも広く見せる復興として県が主体となり取り組むべき。
- ◆ 正殿の破損瓦を粉砕してクチャに混ぜて使う取組は、県が大きくアピールすべき。
- ◆ 施策の方向性に、「将来の改築に向け、植樹、育樹に取り組む」ことを追加すべき。
- ◆ 見せる復興において、文化観光スポーツ部の情報発信の役割は極めて重要。また、那覇市も積極的に関わるべき、さらに指定管理者の役割も重要。
- ◆ 今回の復元において、木材と石材以外にも県内の地域資源をどう使っていくのか、地域とどう連携するのかを追記すべき。
- ◆ 平成の復元に比べ、今回の復元では県民が参画している、という意識がある。尚家から寄贈された貴重な文化財もあり、期待される役割において、地域住民ではなく那覇市としての位置づけを明確にするべきである。

基本施策2 火災の原因究明及び防火設備・施設管理体制の強化

- ◆ 「省人化」という最新技術を活用したシステムも重要だが、最終的にはそれらを使う人の配置や連絡体制の構築など、人間の力が大切であることを踏まえた取組にする必要がある。
- ◆ 日頃の管理体制は指定管理者が行っており「主な関係主体と期待される役割」に記載すべきである。また「訓練」という言葉をしっかり入れることで目に見えた取組となる。

基本施策3 首里城公園のさらなる魅力の向上

- ◆ 首里城を中心として、龍潭をはさみ、円覚寺や中城御殿、玉陵など、琉球王国の歴史文化ゾーンとして、半日、1日でも過ごせるような整備を目指すべき。
- ◆ 観光の面から、首里城や玉陵、復元する中城御殿、円覚寺などの入場券をセットにするなど、一体的な運営の視点が必要。
- ◆ より深い取り組みとするために「主な関係主体と期待される役割」に那覇市、文化観光スポーツ部と地域住民団体を含める必要がある。
- ◆ 中城御殿跡に復元する建物に展示収蔵機能を設ける話は、県が積極的に国に提案すべき。
- ◆ 円覚寺本殿等の復元を検討する際は、本殿で美術工芸品の展示機能を設ける等、具体的な活用を検討してほしい。
- ◆ 中城御殿跡だけの収蔵機能は手狭ではないか。中城御殿跡は純粋に皇太子の邸宅として復元し、将来的には国学跡である芸大の敷地に、修復に関連する施設も含め首里城に関連する諸々のものを置くという大きな計画の視点も必要。
- ◆ 施策3と施策6は関連するため、施策3のねらいにおいて「新・首里杜構想の中で」と明記してはどうか。(P13,5行目)
- ◆ 守礼門や継世門、御内原など、それぞれのストーリーに焦点をあて、観光資源化し的確に発信することで県民の誇りにつなげる視点で取り組む必要がある。

基本施策4 文化財等の保全、復元、収集

基本施策5 伝統技術の活用と継承

- ◆ 今回の火災で被災した漆器類の修復には20年ほどかかるとされている。芸大には将来を見据え専門コースを作ることを考える必要がある。超長期的な取組になるが、沖縄の文化財は沖縄の地において修復し、研究もするという体制が作れるよう県立芸大と連携して取り組み、方向性を示すべき。
- ◆ 漆器について、文化財クラスのを修理できる高度な技術を持った人は国内に10人もいない。芸大で修復技術を学ぶ環境ができたとしても、そこから10年くらい修行が必要かもしれない。保存科学(分析)についても専門的に学ぶ必要があり簡単なことではないが、沖縄に修復センターを作り、世界各地にある沖縄の美術工芸品は沖縄で修復できるというところを目指し、県は決意を持って取り組むべき。
- ◆ 中城御殿跡だけの収蔵機能は手狭ではないか。中城御殿跡は純粋に皇太子の邸宅として復元し、将来的には国学跡である芸大の敷地に、修復に関連する施設も含め首里城に関連する諸々のものを置くという大きな計画の視点も必要。再掲

基本施策6 「新・首里杜構想」による歴史まちづくりの推進

- ◆ 「まちづくり」の施策が具体化されていないため、よく分からない。歴まち法は那覇市が手を上げないと動かないが、国も県も一緒になって取り組む姿勢が必要。
- ◆ 観光地でもある首里のまちづくりには民間企業の役割も重要であり、「主な主体と期待される役割」に企業も位置づけるべき。
- ◆ 首里杜構想は風景づくりであり100年計画である。超長期的に見据える必要がある。

- ◆ まちづくりは文化・経済も大きく関わってくる。ねらいについては、「文化の発展・振興による沖縄振興につなげる」といった所を追記した方がよい。
- ◆ 首里城を中心として、龍潭をはさみ、円覚寺や中城御殿、玉陵など、琉球王国の歴史文化ゾーンとして、半日、1日でも過ごせるような整備を目指すべき。再掲

基本施策 7 歴史の継承と資産としての活用

- ◆ 周遊というキーワードがあるが、継世門は泡盛や琉球料理を味わえる場所に近接しており、出入口を柔軟に対応する視点も大切。
- ◆ 首里には泡盛、味噌、紅型など100年以上の歴史を持つ伝統産業があり、これらにスポットをあてた周遊や観光資源の発掘も重要。
- ◆ 32軍壕だけでなく、公園内には留魂壕もあり、この活用も検討すべき。
- ◆ 学校教育において首里城を活用することについて、教育現場との連携が必要。
- ◆ 県外、海外に向けて首里城の観光拠点的価値の発信という面で文化観光スポーツ部の取組が重要。
- ◆ 復興過程において、北部から木材を運ぶ時には国頭サバクイを、また与那国から大龍柱の石材となるニービヌフニを運ぶ時には木遣り（きやり）、再建中には首里の大城（うふぐしく）グェーナといった各地の芸能も一緒に行う事で、地域文化の伝承や、そこに住む人々への誇りにもつながる。再掲
- ◆ 木挽き式などの行事は県民や観光客にも広く見せる復興として県が主体となり取り組むべき。再掲
- ◆ 観光の面から、首里城や玉陵、復元する中城御殿、円覚寺などの入場券をセットにするなど、一体的な運営の視点が必要。再掲
- ◆ 守礼門や継世門、御内原など、それぞれのストーリーに焦点をあて、観光資源化し的確に発信することで県民の誇りにつなげる視点で取り組む必要がある。再掲

基本施策 8 琉球文化のルネサンス

- ◆ たたき台には首里城で演じられる芸能は衣装等にもこだわりを持って取り組めるような環境作りに取り組む、とある。芸能と工芸は深く関わっており、協働する部分であり、県の取組をより具体的に示すべき。
- ◆ 県立の劇団を設置し、県内国内、世界を巡り、世界に琉球文化を発信していく。これは県内外から寄せられた寄附金に対するお礼でもある。
- ◆ 沖縄の伝統工芸品を保有している国内外の美術館等で展覧会を行い、合わせて芸能も披露し琉球文化を発信してほしい。これは文化を担う人材の育成にも繋がる。
- ◆ ルネサンスとは古典を学んで新しく創るという視点があるが、新しい琉球文化をどう作るかをもっと打ち出すべき。
- ◆ 復元される首里城では、新しい形でとして、島々、村々の民俗芸能も盛んに行われ、各地域の人たちにとって、搾取の象徴ではなく、新たな文化の発祥の地とすることがルネ

サンスではないか。

- ◆ 県芸大を卒業した人材がさらに磨きをかけ沖縄の伝統文化発展継承に貢献できる仕組み作りが必要。
- ◆ 復興過程において、北部から木材を運ぶ時には国頭サバクイを、また与那国から大龍柱の石材となるニービヌフニを運ぶ時には木遣り（きやり）、再建中には首里の大城（うふぐしく）グェーナといった各地の芸能も一緒に行う事で、地域文化の伝承や、そこに住む人々への誇りにもつながる。再掲
- ◆ 木挽き式などの行事は県民や観光客にも広く見せる復興として県が主体となり取り組むべき。再掲

その他

- ◆ 歴まち法の計画策定主体は那覇市であり、市の積極的な取組をのぞむ。
- ◆ 安谷川の碑文や宝口樋川の碑文など首里城周辺にあったたくさんの碑文を復元することによって、かなりの人たちの勉強になるため、引き続きいろんな碑文を建てていくということも取り組んでほしい。